

〈追悼論文〉

夢見る人ボルヘス

木 村 榮 一 (神戸市外国語大学)

Borges, el soñador.

En su poema “Lectores”, Borges dice así :

De aquel hidalgo de cetrina y seca
Tez y de heroico afán se conjetura
Que, en víspera perpetua de aventura,
No salió nunca de su biblioteca.
La crónica puntual que sus empeños
Narra y sus tragicómicos desplantes
Fue soñada por él, no por Cervantes,
Y no es más que una crónica de sueños.
Tal es también mi suerte. Sé que hay algo
Inmortal y esencial que he sepultado
En esa biblioteca del pasado
En que leí la historia del hidalgo.
Las lentas hojas vuelve un niño y grave
Sueña con vagas cosas que no sabe.

Según Borges, “Don Quijote” no fue escrito por Cervantes, sino soñado por un hidalgo manchego que no salió de su biblioteca. Y Borges se identifica con ese hidalgo soñador. Este hidalgo, que estaba fascinado por los libros de caballería, vendió sus terrenos para comprarlos y los empezó a leer con mucha afición y gusto. Se enfrascó tanto en su lectura que se le pasaban las noches de claro en claro. Por fin se le llenó la fantasía de todo aquello que leía en los libros y vino a perder el juicio. Este hidalgo, que llegó a confundir la realidad con la fantasía, era un gran lector y soñador que vivió en el mundo de los sueños. Borges, quien se identifica con el hidalgo, es también soñador.

Así para el hidalgo como para Borges, el libro es un mundo mágico que nos confiere sueños, y Borges, a través de los libros, ha soñado tanto. En el “Prólogo” de “La cifra” dice Borges :

“Al cabo de los años, he comprendido que me está vedado ensayar la cadencia mágica, la curiosa metáfora, la interjección, la obra sabiamente gobernada de largo aliento. Mi suerte es lo que suele denominarse poesía intelectual. La palabra es casi un oximoron ; el intelecto (la vigilia) piensa por medio de abstracciones, la poesía (el sueño), por medio de imágenes, de mitos o de fábulas. La poesía intelectual debe entretejer gratamente esos dos procesos.”

Borges no nos ha dejado ninguna obra larga como “Don Quijote”, pero ha escrito muchos poemas, ensayos y cuentos. Todas estas obras son sueños cortos que ha soñado Borges y nosotros que los leemos, también soñamos sueños soñados por él. Entonces Borges el soñador se cubre en un sueño soñado por nosotros.

「エジプトの王プロテウスに似て変幻自在、あらゆるものに姿を変えることができた」シェイクスピアは、その死の前かあと

に神の前に立ってこう訴える。

「わたくしは、これまで空しく多くの人間を演じてきましたが、今や、ただ一人の人間、わたし自身でありたいと思っております」すると、つむじ巻く風のなかから神の御声があったという。「わたしもまた、わたしではない、シェイクスピアよ、お前がその作品を夢みたように、わたしも世界を夢みた。わたしの夢に現われるさまざまな形象のなかに、確かにお前もいる。お前は、わたしと同様、多くの人間でありながら何者でもないのだ⁽¹⁾。」

現代ラテン・アメリカ文学における先駆的な作家と言えば、ホルヘ・ルイス・ボルヘス、ミゲル・アンヘル・アストゥリアス、それにアレホ・カルペンティエルの三人をまず挙げなくてはならないだろう。そのうちアストゥリアスとカルペンティエルはすでに物故しているが、1986年には最後に残ったボルヘスもついに永眠した。ボルヘスの死はたしかに、ラテン・アメリカ文学にとって大きな損失であり、同時にひとつの時代の終焉と新しい時代の幕開けを告げるものであるが、そうした巨視的な見方とまったくかわりなく、『他者、自身』(El otro, el mismo)以降の『幽冥礼讃』(Elogio de la sombra)や『群虎黄金』(El oro de los tigres)、『深遠なバラ』(La rosa profunda)、『鉄の貨幣』(La moneda de hierro)、『夜の歴史』(Historia de la noche)、『暗号』(La cifra)、『陰謀者たち』(Los conjurados)といった詩集、あるいは『七夜』(Siete noches)、『ボルヘス講演集』(Borges oral)などの講演録などの後期の著作に親んだ読者なら、彼の訃報に接して言いようのない寂しさと悲しみを味わっていることだろう。

ボルヘスの比較的若い頃の著作、たとえば『伝奇集』(Ficciones)、『不死の人』(El Aleph)といった短編集、あるいは『論議』(Discusiones)、『続・審問』(Otras inquisiciones)などのエッセイ集、これらの作品がその該博きわまりない知識や彼ならではの特異な着想と想像力、難解深遠な文体によって数多くの読者を眩惑、魅了してきたことは周知の通りである。しかし、友人

のアドルフォ・ピオイ＝カサーレスを通して、「少しずつバロック的なものを偏愛する傾向からいやされていった⁽²⁾」と語るボルヘスの綴った晩年の著作は、慎しやかな人柄の学匠詩人ボルヘスの生の声を聞く喜びを与えてくれるだけでなく、読む者を瞑想と夢想の世界へと誘ってゆく。本稿では、そうしたボルヘスの後期の作品を中心に詩人ボルヘスを取り上げてゆきたい。

☆ ☆ ☆

ラテン・アメリカの代表的な詩人オクタビオ・パスの詩集『言葉のかげの自由』(Libertad bajo palabra)はシュルレアリスティックで鮮烈な言語とイメージのちりばめられたすぐれた作品だが、その中に「寓話」と題された詩が収められている。

寓 話

火と大気の時代

水の青年時代

緑から黄

黄から赤

夢から覚醒

欲望から行為

その間にはわずか一歩しかなく

きみはそれを楽々と越えた

昆虫は生命を備えた宝石であり

温もりは池の端で憩っていた

雨は乱れた髪の柳であり

きみの掌では一本の木が生い茂った

あの木は歌をうたい笑い未来を予言した

その予言は空間を翼で覆った

あの時代には鳥と呼ばれる単純無比の奇跡があった

すべては万人のものであり

万人はすべてのものであった

あの頃には裏のないたったひとつの大なる言葉があった

太陽のような言葉が

それがある日こなごなに砕け散った

その細かな断片がぼくたちの話している言葉なのだ

けっしてひとつに結びつくことのない断片

世界が、千々に砕けた自分を映し出す割れた鏡⁽³⁾

地球が誕生し、生命が、そして人間が生まれてくる。夢想する人はやがて目覚めて意識を、欲望を抱くようになるが、あの時代には欲望と行為とのあいだにはわずかな距離しかなかった。万物は生命をことほぎ、自然は掌から木が生い茂るほどに人間とひとつに溶け合い、鳥の群がる木は「うたい笑い未来を予言し」、天駆ける奇跡の小鳥も身近にいた。人間が森羅万象とひとつに結びついていた黄金時代にあって、言葉は裏の意味をもたないたったひとつの大なる言葉であった。しかし、その至福の時代も終わりを告げ、大なる言葉はこなごなに砕けて無数の断片と化し、世界もまた、千々に砕けた鏡に自らを映し出すようになった。

この詩はぼくたちの想像力をさまざまに掻き立てるが、分裂し砕け散った大なる言葉という一節はただちにT・S・エリオットの「聖灰水曜日」を思い起こさせる。

失われし言葉は失われ、^{つひ}費えし言葉は費え、
聞かず、語られざる
言葉の 語らず聞こえざるものとするも
なお 語られざる言葉、聞かれざる御言葉あり
言葉の外なる言葉、この世の内なる
この世のための御言葉あり。
光は闇にかがやきたれども

しずまらぬこの世　なお御言葉にそむきて黙したる御言葉の核をめぐりて
渦巻きたり。

わが民よ、われ汝^{なんじ}になにをなししや。

言葉の見出さるるはいずこ、言葉の反響^{こだま}するはいずこなりや。そはここな
らず、海のうえにも島々のうえにも、また本土のうえにも、また砂漠にも、
雨降る土地にも、かかる静けさの　あることなし、

昼といわず夜といわず

暗黒^{くらき}を歩む人々よ

ここにはおんみらのための適時も適所もあることなし

かの姿を避くる人々に恩寵の場所なく

騒音のなかを歩みてかの声をしりぞくる人々によるこびの時なし⁽⁴⁾

「荒地」の中で非有の都市をさまよう亡霊のような人々の姿を描き、「うつろなる人々」でくだけたガラスと砕けし円柱のある死の王国を彷徨する「剝製の人間」の姿をうたったあと、エリオットはここに引用した作品で「御言葉」に耳を傾けよ、と語りかける。神、中心を失い、四分五裂した世界の中を歩む亡霊のような現代人にとってなによりも必要なのは「御言葉」であると彼は説いているが、「荒地」から「うつろなる人々」を経て、この「聖火水曜日」に到ると、その詩風がきわめて宗教的、倫理的色彩の濃いものになっていることが分かる。彼の詩風がこのように変化したのは、分裂した世界、分裂した感性への絶望感であることは疑い得ない。

そう言えば、カルロス・フエンテスの小説『アルテミオ・クルスの死』の主人公もまた、死の床に横たわりながら、娘のハンドバックに取りつけられた鏡に映る自分の額を見て、心の中でこう絶叫する。

「……顔は？ わたしの顔が映っていたハンドバックはテレサがテーブルから取上げたので、それを思い出そうとしてみる。不揃いな鏡に映ってい

た自分の顔の一部を、一方の目は耳のすぐそばにあって、もう一方の目はひどくかけ離れたところにある。回転する三枚の鏡に映った歪んだ顔の一部、額に汗が流れる。もう一度目を閉じる。頼む、頼むから、わしの顔とわしの身体を返してくれ……⁽⁵⁾」

三枚の鏡に映る歪み分裂した顔を見て、自分の顔を、身体を返してくれと叫ぶクルスもまた典型的な現代人のひとりである。

エリオットの「聖灰水曜日」を読むと、詩人エリオットの像に重なり合うようにして宗教家、倫理家エリオットの相貌がのぞいてみえるが、このエリオットと対照的な詩人といえば、アンドレ・ブルトンの名が思い浮かぶ。

彼の『シュールレアリスム宣言』を読むと、思想家、もしくは裏返しにした倫理家ブルトンの像が前面につよく現われていることに気づく。ブルトンが、「どうしても、生と死、現実的なものと想像上のもの、過去と未来、伝達可能なものと伝達不可能なもの、高いものと低いものが、そこからはもはや互いに矛盾したものとは感じられなくなるような精神の一点が存在することを信じないわけにはゆかない⁽⁶⁾。」と書くとき、彼が目ざしているのがきわめて宗教的色彩の濃い世界であることは疑い得ない。また、「シュールレアリスムは、これまで顧られなかった或る種の連想形式の優越した現実性や、夢の全能性や、思考の無私無欲な働きなどに反対する信頼に基礎を置いている。それはまた、他のあらゆる心的機構を窮極的に崩壊させ、人生の主要な諸問題の解決において、それらにとってかわる傾向を示している⁽⁷⁾。」という一節やそれに続く既成の価値観や芸術に対する、あるいはブルジョワジーに対する痛烈な批判、そうしたものはたしかに刺激的ではあるが、どこまでも思想家の言葉である。詩人、小説家を問わず作家というものは言語によって一個の世界、宇宙を作り上げるところにその真骨頂があるのではないだろうか。彼らが言葉を相手に悪戦苦闘しながら創作を行っている理由も、まさしくその点に求められる。文化的、歴史的背景や知的状況の相違をあえて無視して言わせてもらえば、『シュールレアリスム宣言』を書いたブルトンよりは、「詩法」と題する作品の中で次のようにうたっているチリの詩人ビセンテ・ウイ

ドプロのほうがぼくは好きである。

詩よ 鍵となって
千の扉を開くのだ。
木の葉が落ち 何かが飛び過ぎる、
その音を聞きとめたものよ 心を震わせよ。

あまたの新しい世界を創造し 言葉に心を配るのだ。
生命をもたらさぬ形容詞は 人を殺す。

.....

詩人たちよ なぜバラの花を歌うのだ
詩の中で 花を咲かせてやればいいではないか。

陽のもとにある 一切のものは
われわれのために生きている。

詩人とは小さな神にほかならない⁽⁸⁾。

いささか稚気にあふれた感もするが、それ以上に作者の詩作に対する、言葉による創造に対するひたむきな熱情が伝わってくるさわやかな作品である。ビセンテ・ウイドプロは「(創造主義の詩は)外の世界のいかなるものとも似てはいない。それは存在しないものを現実的なものにする。すなわち、自ら自身を現実に変えるのである。それは驚異的なものを創造して、それに独自の生命を吹き込む。それは客観的世界においてはけっしてありえないような異様な状況を作り出す。かくして、その状況がほかでもない詩の中に存在することになるのである⁽⁹⁾。」とのべているように、詩作を純粋な創造的行

為であるに見なし、またその手段としての言葉に絶対の信頼を置いていた。創作を神の創造のように見なして創作を行っているのはワイドプロだけではない。なにものにも寄りかかることなく宙に浮かぶ、球体のような小説を夢見たフローベルを師表と仰ぐペルーのマリオ・バルガス＝リョサは、小説家として創作について次のように語っている。

「小説を書くということは現実に対する、神に対する、神が創造された現実に対する反逆行為にはかならない。それは真の現実を修正、変更、あるいは廃棄することであり、それに替えて小説家が創造した虚構の現実をそこに置こうとする試みにかならない。小説家とは異議申立者であり、あるがままの(もしくは彼がそうだと信じる)生と現実を受け入れがたいと考えるがゆえに、架空の生と言葉の世界を創造するのである。人が小説を書くのは、自分の生に満足できないからである。小説とはその一作、一作が秘めやかな神殺し、現実を象徴的な形で暗殺する行為にはかならない⁽¹⁰⁾。」

また、オクタビオ・パスは、宇宙を一巻の書物の中に封じこめようという野心的な意図を抱いたマラルメを現代でもっともすぐれた詩人のひとりと考えているが、そのパスの『言葉のかげの自由』の序を見ると、詩の創造について次のように語っている。

「……ぼくは夕暮を、夜を、翌日を創造する。ぼくは木を、雲を、岩を、海を支える……。」

ついでぼくは、荒涼とした山脈を、日干しレンガの集落を、また水溜りと愚かなビルーの木の、ぼくに石を投げつける白痴の子供たちの、ぼくを指差す恨みっぱい人たちのこまごまとした現実を創造する。ぼくは恐怖を、希望を、真昼——太陽の逆上、きらめく虚偽、かりそめの愛人を去勢する女たちの父——真昼を創造する。

ぼくは火傷と犬の吠える声を、トイレの中でのマスターベーションを、ごみ捨

て場の幻影を、幽閉を、ノミとオーヴァーシューズを、スーブの奪い合いを、密告を、気味の悪い動物を、汚わしい交渉を、夜間の尋問を、自省を、判事を、被害者を、証人を創造する。きみは最後に挙げた三者、つまり判事、被害者、証人なのだ。きみはいったい誰に訴え、どのような知恵を用いて、きみを非難している相手を倒せばいいのだろうか？ 陳情書や嘆きの声、弁論などなんの役にも立ちほししない。閉ざされたドアを叩いてもむだだ。ドアなどどこにもありほししない、あるのは鏡だけだ。目をつむって、人々のあいだに戻ろうとしてもだめだ。まだそれだけの知恵がぼくには残されている。ぼくは鏡を砕き、そこに映る自分の姿をこなごなに砕いてやろう——鏡は毎朝、敬虔にもぼくの共犯者、ぼくの密告者を映し出している。意識の孤独と孤独の意識、パンと水だけの一日、水のない夜。早魃、瞼のない残虐な目である太陽がならした平原、おお、意識よ、閃光の希望もなく過去と未来が燃え上がる純粋な現在。一切は、それ自身どこにも流れ込むことのないこの永遠の中に流れこんでゆく。

むこう、道が消え、沈黙が終わるあたりで、ぼくは絶望を、ぼくという人間を考え出す頭脳を、ぼくを描き出す手を、ぼくを見つけ出す目を創造する。ぼくはぼくを創造してくれる自分の似姿である友人を創造する。ぼくは自分の敵対者である女性を創造する……。

沈黙と騒々しい雑音に対抗してぼくは言葉を創造する、日毎自らを創造し、ぼく自身を創造する言葉を⁽¹¹⁾。」

パスがこの引用の途中で〈きみ〉と呼びかけている相手はおそらく読者だろう。パスを含めてぼくたちは判事であると同時に、被害者、証人でもあるのだが、加害者はどこにもいないという状況の中に生きている。そこには神はもちろん悪魔も存在しない。したがって、訴えようにもその術はないし、誰かに訴えるためにドアを叩こうとしても、そこには鏡があるだけである。

詩人である〈ぼく〉は、そこで鏡をこなごなに砕くが、その行為を通して〈ぼく〉は意識の孤独と孤独の意識を手に入れる。大いなる唯一の言葉が失われた時代の詩人にはそれ以外の道は残されていない。詩人を待ち受けているのは厳しく苦難にみちた日々だが、純粋な現在である意識を通してはじめて創造的行為が可能になる。苦難にみちてはいるが、至高の創造が、

先に引用したウイドブロやバルガス＝リョサ、あるいはパスの文章を読むと、言葉をどこまでも信じて創造を行おうとする作家、詩人の熱情が伝わってくるが、おそらくそれは新大陸の文学の若々しい生命力ともかかわっているのだろう。

ここまで書いてきて、ぼくはふと「ことばことば」という大岡信の詩があったのを思い出した。

ことばことば

だれにも見えない馬を
 ぼくは空地に飼っている
 とときどき手綱をにぎって
 十二世紀の禅坊主に逢いにゆく
 八百年を生きた
 かれには肉体の跡形もない
 かれはことばに変わってしまった肉体だ
 やがてことばでさえなくなるはずで
 それまでは仮のやどり
 このぼの庇を借りているのだという
 華が開き世界が起つ
 とかれがいえば
 かれという華が聞き かれという世界が起つのだ
 ことばとして ことばのなかで ことばとともに
 開かれまた閉じ

浮かびまた沈み
 生まれたり殺されたりしながら
 かれはことばでありつづけ
 ことばのなかに生きつづけて
 死ぬことができない
 地にことばの絶えぬかぎり
 かれは岩になり車輪になり色恋になり
 血になり空になり暦になり流転しつづけ
 そのためにかれは
 自分が世界を等量であるという苦い認識に
 さいなまされつづけねばならないのだ
 何が苦しいとって
 ことばがわが肉体と化すほどの
 業苦はない
 人間がそれを業苦と感じないのは
 彼らが肉体をほんとうに感じていないからだ
 この枯れはてた高僧は
 いうのである⁽¹²⁾。

ここに言う禅坊主とは誰のことだろう。12世紀とあるからには栄西かもしれないが、ひょっとすると『碧巖録』に登場する禅僧のひとりかもしれない。いや、そのようなことにかかざらう必要はあるまい。禅宗は「不立文字」、「直指人心、見性成仏」を標語としており、かつ「禅の道は、単純といえば極めて単純であって、誰がいつの時代にどこを歩いてもみな同じ道を歩いて⁽¹³⁾」いるからである。ともあれ、この詩に言う馬とは書物を指すのだろう。現代の詩人は書物という馬に乗って時空の旅をして12世紀の禅坊主に会いにゆく。その禅坊主を通して詩人は、ことばの持つ力とことばが肉体と化した時の苦しみを教えられるが、この詩の後半の部分は多分にパスやバルガス＝

リョサの考え方と共通するものがある。

しかし、この詩の前半分を通してほくはボルヘスを思い浮かべた。ボルヘスもまた書物という馬に乗って時空を旅し、ギリシャの詩人、哲学者に、ローマの隊長に、北欧の戦士たちに、中世の神学者たちに、ダンテ、セルバンテス、シェイクスピア、ミルトン、ダン；スウェーデンボルグ、パスカル、ショーペンハウワーなどに会いにゆき、彼らの言葉に耳を傾け、対話を楽しんだ。ボルヘスはまさに、書物という馬に乗って自在に時空を旅し、悠々とそれを楽しんでいたのである。

あの詩人が馬を飼っているのは書齋、あるいは図書館だろうが(因みに、スペイン語で *biblioteca* といえはこの両者を差す)、その図書館、書齋についてボルヘスは次のように語っている、

「図書館とは魔法にかけられた数多くの靈魂が閉じこめられている不思議の部屋である、とエマソンは言っている。われわれが呼びかけると、それらの靈魂は目を覚ますが、それをひもとかないかぎり、本はまさしく文字通り、一個の体積、いろいろな事物の中のひとつの物でしかない。われわれがそれをひもといた時、つまり本が読者に出会った時に、芸術的事実が生じる、読者にとっても、本自体はたえず変化し、新しいものをつけ加えてゆく。なぜなら、われわれ自身が変化するからである。(わたしの好きな引用を使わせてもらえば)われわれはヘラクレイトスの言う川にほかならない。ヘラクレイトスによれば、昨日の人間はもはや今日の人間と同じではなく、今日の人間は明日の人間と同じではないだろうとのことである。われわれはたえず変化してゆく。それゆえ、一冊の本を読むたびに、それを読み返すたびに読み返した内容を思い出すたびに、テキストが新しくなるといってもけって過言ではない。テキストもまた、ヘラクレイトスの言う変りゆく川なのである。⁽¹⁴⁾」

人間が川のように生々流転するものであれば、その人間が読む本もまた、読み手の人間に応じて変化してゆく。テキストとは固定した不易のものではなく、変化の川なのである。人はその川に身をひたして「明晰な夢⁽¹⁵⁾」、「方

向づけられた夢⁽¹⁶⁾」を見る。人が書物をひもといたとたんに、書物という夢の世界の扉が開かれ、魔法にかけられた靈魂が生命を得て、飛び交いはじめる。たしかあれはギュターヴ・ドレの絵だったと思うが、甲冑姿のままいすにかけたドン・キホーテが本を読んでいる作品がある。キホーテは左手に本を持ち、右手で剣をふりかざしているが、そのまわりでは無数の騎士が奔めき合って彼に襲いかかろうとし、美しい乙女が救いを求め、数多くの怪物や奇怪な化物が取りまいてる。騎士道小説を読みすぎて妄想に取り憑かれた郷土の姿をあざやかに描き出したこの銅板画は、同時に書物が夢の世界を開くといういつ変りない真実をよく伝えている。そう言えば、ボルヘスもキホーテをテーマにした詩を何編か書いているので、そのひとつを紹介してみよう。

読 者

瘦せた憂い顔の郷土は
 明日こそ冒険の旅に出よう
 出ようと思いながら その書齋から
 一歩も出なかったと推察される
 彼の宿望と悲喜劇的な奇行を語る
 忠実な年代記は セルバンテスではなく
 あの郷土が夢みたものであった
 あれこそはあまたの夢の年代記なのだ
 わたしの運命もそれと変わらない 不滅の本質的なものがあると知りながら
 わたしはそれを かつてあの郷土の物語を読んだ
 過去の図書館に葬り去ったのだ
 いま一人の少年が真剣な面持で ゆっくりと
 ページを繰りながら 未知の漠とした夢を見ている⁽¹⁷⁾

ボルヘスによると、『ドン・キホーテ』はセルバンテスの書いたものではなく、キハーナともキハーダ、ケサーダとも呼ばれていたある郷土の夢想だっ

たとのことである。この郷士は大変な本気違いで、騎士道小説にうつつを抜かし、自分の地所を売り払ってまことに高価な、みごとに装訂された大型本を百冊以上、小型本も少々買い込んで日夜それを読みふけていた。彼は何度もくり返し読むうちに、小説の文章をそらんじるほどになり、ついには現実と妄想の区別がつかなくなって、修業遍歴の旅に出たと書かれているが、それほどまで本の世界にのめり込んでいたのなら、遍歴の騎士として武者修業の旅に出るような時間的余裕はなかったのではあるまいか、いや、そこまでとっぴり夢の世界にひたっていたのなら、なにもサンチョを供に連れて旅に出る必要などなかったにちがいない。かく言うわたしボルヘスもまた、書物という夢の世界に生きていたひとりだが、目を転じると今しもひとりの少年が真剣な面持で夢の世界にひたり込んでいる。あの郷士もわたしも、それに少年もまたともに、移ろいゆく川のようにたえまなく変化する人間として夢の世界を開く本に魅了されているのだ、とボルヘスは語りかけている。

つまり、あの郷士とはこのわたしボルヘスであり、図書館で夢中になって本を読んでいる少年でもありうるということなのだ。言ってみれば、セルバンテスもキハーノも、ボルヘスもあの少年も同一の人間なのである。少なくとも夢見る人間としてのわたし(ボルヘス)は、アロンソ・キハーノと本質的にひとつ変わるところがない。最晩年の詩集『暗号』に収められた作品「名声」の、

わたしは図書館から一步も出なかった

アロンソ・キハーノであっても　ドン・キホーテになりたいとは思わない

という一節は、ボルヘスがセルバンテスでもなければドン・キホーテでもなく、書物に取り憑かれ、日夜書物の世界を旅し、夢想にふけた一郷士アロンソ・キハーノと自らを重ね合わせていることをなによりもよく物語っている。つまりボルヘスはキハーノと同じように、自分の書齋から一步も外に出ることなく、空地に飼っている馬に乗ってさまざまな時間空間を旅し、古代

の哲人や古代の英雄、中世の神学者、北欧の戦士、カバラ学者、中世、近代、現代の文学者、詩人、哲学者、時にはまたブエノスアイレスの場末のならず者や自分の先祖(この場合は、思い出話や聞き語りを通して)などと会い、数知れぬ夢を織り上げたのである。

先に挙げたバルガス＝リョサ、パス、大岡信などがそれぞれに言葉による創造の苦しみとその困難を語っているように、ボルヘスの織り上げる夢もまた、ただそれだけでは創造と結びつかない。死を迎える5年前に出版した詩集『暗号』La cifraの序で、ボルヘスは自らの詩作についてこう語っている。

「この齢になってようやく悟ったのだが、わたしには魔術的な韻律や奇をてらった隠喩、間投詞、巧みに構成された、もしくは息の長い作品を試みる才能は授けられていない。知性詩を呼びならわされているもの、これがわたしに与えられた運命なのだ。考えてみると、知性詩というのは矛盾語法といってもおかしくない言葉である。なぜなら知性(覚醒)は抽象化を通じてものを考え、詩(夢)はさまざまなイメージ、神話、あるいは寓話を通してものを考えるからである。知性詩とは、このふたつのプロセスを楽しみながら織り合わせてゆくことなのである⁽¹⁹⁾。」

ボルヘスにとって言葉による詩的創造とは、知性と詩、覚醒と夢を織り合わせることにほかならない。つまり、とりとめない夢想に知性を通して形を与え、方向づけること、それが彼にとっての詩作なのである。彼はしかし、自らを郷土アロンソ・キハーノになぞらえているように、書物を通して夢見ることにより大きな喜びを見出ししていたにちがいない。ボルヘスは『ドン・キホーテ』をアロンソ・キハーノの夢想だと語っている。もしあの作品が単にキハーノの夢想であり、書物として残らなければ、キハーノという名の郷土はラ・マンチャの寒村でごく少数の人たちをのぞいて、誰にも知られずこの世を去ったことだろう。そのことを考えた上で自らをアロンソ・キハーノという名の郷土になぞらえるボルヘス、「ラテン語に郷愁⁽¹⁸⁾」をおぼえると言うボルヘスはおそらく、Bene qui latuit bene vixit.(よく世に隠れたるものはよく生きたり)という言葉愛していたにちがいない。

すでに著名の士となった時期の作品「ボルヘスとわたし」の中の、

さまざまなことがその身に起こっているのは、もう一人の男、ボルヘスである。わたし自身はブエノスアイレスの市中を徘徊し、今では機械的にといった感さえあるが、足を止めて玄関のアーチや内扉をばんやり眺めたりしている⁽²⁰⁾。

という一文からもうかがえるように、世に顕われることよりも隠れて生きることを願ったボルヘスは、書物を通して数限りない夢を見、その夢を方向づけることによって数多くの作品を残した。ぼくたちもまた夢見る人ボルヘスの残してくれた書物、とりわけその詩を通して夢見る人になる。その時ひとつの転移が起こる。つまり、一冊の書物と化した夢見る人ボルヘスは夢見られる人となるのである。短編「円環の廢墟」に描かれている人物のように、ぼくたちもまたその時、郷士アロンソ・キハーノのように夢見る読者になるが、それはまたボルヘス自身であり、あの図書館にいる少年でもある。かくして、ここにひとつの円環が生まれる。

「シェイクスピアの一行を繰り返すところのすべての男は、まさにウィリアム・シェイクスピアで「ある」と⁽²¹⁾。」

註

- (1) ボルヘス、ホルヘ・ルイス『創造者』鼓直訳、p. 101~102；国書刊行会、昭和50年。
- (2) Borges el memorioso : Conversaciones de Jorge Luis Borges con Antonio Carrizo, p. 79. ; Fondo de Cultura Económica, México, 1982.
- (3) Octavio Paz ; Libertad bajo palabra, p. 21~22 ; Fondo de Cultura Económica, México, 1978.
- (4) T・S・エリオット「聖灰水曜日」安田章一郎訳、『世界文学大系』第57巻、p. 291、筑摩書房、昭和35年。
- (5) カルロス・フエンテス『アルテミオ・クルスの死』木村榮一訳、p. 7、新潮社、1985年。
- (6) アンドレ・ブルトン『シュールレアリスム宣言集』森本和夫訳、p. 90、現代思潮社、1975年。

- (7) 同上, p. 43.
- (8) Vicente Huidobro : *Obras completas*, tomo I, p. 219 ; Edit. Andrés Bello, Santiago de Chile, 1976.
- (9) *Op. cit.*, p. 733.
- (10) Mario Vargas Llosa ; García Márquez : *Historia de un deicidio*, p. 85 ; Barral Editores, Espana, 1971.
- (11) Octavio Paz ; *Op. cit.*, p. 9~10.
- (12) 大岡信 『大岡信詩集』 p. 87~88 ; 現代思潮社, 1969年.
- (13) 西谷啓治 『禅家語録—II』 に付された解説, p. 416, 『古典世界文学』 第30巻収集, 筑摩書房, 昭和51年.
- (14) Jorge Luis Borges ; *Siete noches*, p. 101~102 ; Fondo de Cultura Económica, México, 1980.
- (15) ボルヘス, J. L. 『創造者』 鼓直訳, p. 10 ; 国書刊行会, 昭和50年.
- (16) ボルヘス, J. L. 『プロディーの報告書』 鼓直訳, p. 14 ; 白水社, 1979年.
- (17) ボルヘス, J. L. 『プエノスアイレスの熱狂』 鼓, 木村訳, p. 74~75 ; 大和書房, 1977年.
- (18) Jorge Luis Borges ; *La cifra*, p. 11 ; Emecé Editores, Buenos Aires, 1981.
- (19) *Idem.*, p. 77.
- (20) ボルヘス, J. L. 『創造者』 p. 114.
- (21) ボルヘス, J. L. 『伝奇集』 鼓直訳, (『キリスト教文学の世界』 第18巻, 主婦の友社, 昭和53年所収), p. 165.